



Title	増えるがんと減るがん
Author(s)	松本, 圭史
Citation	癌と人. 1999, 26, p. 4-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23784
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

増えるがんと減るがん

松 本 圭 史*

いろいろながんのなかで、国によって多発するがんはことなる（例えば、乳がん・前立腺がんは欧米で多く日本では少ない。胃癌は欧米で少なく日本では多い）。また、日本においても増えつつあるがんと減りつつあるがんがある。以上のこととは、がんの原因は遺伝や老化だけではなく、生活様式など環境の影響が大きいことを示している。

1) 乳がん、前立腺がんは増える

乳がんや前立腺がんの発生率は20年前には欧米の1/10であったが、日本人の食事などの欧米化によって増加はつづき、現在では欧米の1/5程度になった。

乳がんや前立腺がんは東洋人では非常に少ないので、ずっと以前にはその原因は遺伝的なものであろうと考えられた。しかし、その後に米国在住の日本人、中国人の二世、三世では乳がんや前立腺がんの発生率が米国人に近くなる迄増加することが示されたので、乳がん、前立腺がんの発生には食事などの環境の影響が大きいことが明らかになった。

食事の洋風化といえば基本的には脂肪の摂取が多くなったことで、脂肪摂取の増加、とくに動物性の脂肪摂取の増加を犯人とみた研究が数多く発表されている。しかし、脂肪摂取の増加自身が犯人であるというよりも脂肪を多くとることによる摂取カロリーの増加が主因であるという研究もみられる。

脂肪、牛乳の摂取が高いと乳がんの発生が高くなることはしばしば報告されているが、本当の原因は脂肪だけと決めつけるわけにはゆかない。若い時に卵巣（女性ホルモンの分泌源）を

摘出された婦人の乳がんの発生率は非常に低い（1/10以下）ことで分るように、乳がんの発生には女性ホルモンの影響が大きい。初潮の早い女性、閉経のおそい女性では乳癌の発生率が高い。女性ホルモンの分泌源は主に卵巣であるが、閉経後には女性ホルモンの産生がゼロになるわけではない。脂肪細胞で副腎性の男性ホルモンから卵巣性よりもずっと少ない女性ホルモンが産生される。閉経後婦人の血中女性ホルモン濃度は、肥った婦人で高くやせた婦人で低い。また、閉経後婦人の乳がんの発生率は、80kgの婦人は40kgの婦人の4倍位である。卵巣性女性ホルモンが存在するので脂肪で産生される女性ホルモンの多少は問題にならない閉経前婦人では、乳がんの発生率は肥満と無関係である。閉経後の肥満婦人は明らかに欧米に多く、欧米で乳がんの多い一因になっていると考えられる。日本でも欧米式食事によって閉経後肥満婦人が増加しているが、日本における乳がん増加の一因であろう。以上のように乳がんの発生増加に対して多くの原因が疑われることは、特定の犯人にしほり切れないことである。前立腺がん増加の原因は乳がんよりもさらに分らないことが多い。まだ分っていないといった方がよい位である。

2) 肺がんはまだ増える

肺がんは胃がんをぬいてわが国のがん死因のトップになったが、これからもさらなる増加が予想されている。肺がんの原因としてタバコが大きく取り上げられているが、発生率を3-5倍に増加させると報告されている。世界の多くの国において女性の喫煙率は増加をつづけてい

* 大阪癌研究会理事 大阪府赤十字血液センター所長

るが、20年の間隔をおいてこれらの増加と平行した女性肺がんの増加が認められている。以上の成績は、タバコと肺がん発生の相関を示唆し、肺がんが臨床で問題になる迄に増大するには約20年かかることも示唆する。

それでは、肺がんの原因はタバコだけなのだろうか？肺がんの原因の1つに大気汚染もあげられている。冬期暖房による汚染、車からの排気ガス、ゴミ焼きの煙、未知の大気汚染物質が大なり小なり肺がんの原因になりうるであろう。しかし、残念ながら大気汚染と肺がんの関係はタバコで示されたような明らかなデーターが示しにくいのが現状である。

3) 胃がんは減ってゆく

胃がんといえば日本というように、胃がんはわが国では全がんの30%を占めてNO.1の位置を長く保ってきた。ところが胃がんによる死亡は近年になってかなりの減少を示し、肺がんにNO.1の位置をゆずることになった。何故であろうか？

米国でも昔はがんの中で胃がんが一番多かった。ところが冷蔵庫が普及して食品が塩蔵から冷蔵に変った1930年頃から胃がんは減りはじめ、今では非常に珍しいがんになった。胃がんは塩分のとりすぎが大きい原因と考えられる。近年わが国でも冷蔵庫が普及し、食品中の塩分は減少したので胃がんは減ってきた。高血圧対策としての減塩運動も減少を助長した。

胃がんの原因としては、塩分をはじめとする食生活のほかにウイルス感染、細菌感染（ヘリコバクターピロリ菌）も考えられる。衛生環境の改善による感染の減少も胃がん減少の一因として考えられる。

早期発見による胃がん死亡の減少も示されている。胃がんの集団検診は日本では全国に普及しているが、早期胃がんの発見と治療によって間違いなく胃がんによる死亡は減少している。食生活の改善は胃がんの発生を減少させ、早期胃がんの診断・治療は胃がんの死亡を減少させて日本の胃がんを減少させた。胃がんは今後も減ってゆくであろう。

